

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災から、丸3年を迎えた。復興はまだまだ、気が遠くなるような道のりがある、と被災者の方は言う。今年2月、日本カトリック司教団は、これまでの3年間の支援活動を振り返り、被災地の状況はまだまだ復興にはほど遠く、活動の継続が必要であると判断した。そして、今後3年間、すべての教区、教会を挙げて被災地支援活動に取り組むことを決定した。本号に掲載したミサは、東日本大震災被災地、仙台教区のカテドラルに、すべての教区の司教が集まり、広くそのことを表明するためにささげられたものである。

3.10「東日本大震災犠牲者追悼と復興祈願ミサ」 ～あの日から、明日で3年目を迎えます～

2011年3月11日14時46分、宮城県沖の海底を震源とする、マグニチュード9.0という日本周辺における観測史上最大の巨大地震が発生しました。

震源は、岩手県沖から茨城県沖までの南北約500kmに及び、最大震度は震度7であり、宮城・福島・茨城・栃木の広い範囲で震度6強を観測しました。

この地震によって、巨大な津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害が発生しました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所で発生した水素爆発により、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故が発生しました。



東日本大震災の被災地を「日本のカトリック教会」として今後も継続的に支援することを目に見える形で示すには、全国から司教たちが集まり、信徒たちと心をあわせて、共にミサをささげるのが一番であろう。

2011年3月11日の東日本大震災から丸3年目を直前にした3月10日午後6時から、東日本大震災の被災地、仙台教区のカテドラルである元寺小路教会において、それが実現した。

日本カトリック司教協議会副会長・高見三明長崎大司教区大司教の司式のもと、駐日教皇庁大使、全国から集まったすべての教区の司教16名が、約350人の信徒と共に、ミサをささげた。

<あの日から、明日で3年目を迎えます。>

2014年1月10日時点で、震災による死者・行方不明者は18,524人、建築物の全壊・半壊は、合わせて399,284戸と確認されています。

復興庁によりますと、避難者は昨年暮れ時点で274,088人となっており、いまだ沢山の方々が避難生活を続けており、避難が長期化していることがわかります。特に福島第1原発の放射能汚染は未だ収束しておらず、長期避難を強いられている被災者に深刻な影を落とし続けています。

この未曾有の災害にあって、日本カトリック司教協議会は、震災から5日後の3月16日、仙台教区カテドラルである元寺小路教会に仙台教区サポートセンターを設置し、全国各教区、宣教会、修道会、カトリック系諸団体とネットワークを構築し、今日まで支援活動を行ってまいりました。

仙台教区サポートセンターの支援活動には、カトリックの信者であるなしを問わず多くの人々が駆けつけてくださり、ボランティアとして、あるいはスタッフとして汗を流して下さっております。

集計を行っているカリタススペースの登録ボランティア累計数は、16,300人を超えています。しかしながら、震災後3年を迎え、ボランティアさんの数は減少してきております。

被災された人々への寄り添いの活動は、まだまだ必要とされています。

被災された人々への寄り添いの活動は、まだまだ必要とされていますので、みなさんとともに祈り、ともにそれぞれにできることを続けてまいりましょう。

教皇の祝福と祈りをいただいて開会

「東日本大震災犠牲者と復興祈願ミサ」の開会の挨拶のすぐ後で、駐日教皇庁大使ジョゼフ・チェノットウ大司教が、「教皇フランシスコの名前で、私は今日、皆様に心からのご挨拶と、連帯、お祈りと、特別な祝福をお届けいたします」と、教皇様からの特別の祝福があるミサであり、このミサのために、教皇様が特別に祈ると約束して下さったことを発表された。この時、聖堂の中に教皇様を中心に、全世界の教会と一致しているという雰囲気、さらに広がったのが感じられた。



説教

説教は、仙台教区の平賀徹夫司教で、次のように述べた。

「現代人の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない」という『現代世界憲章1』を引用し、東日本大震災の直後から、日本国中、世界中から、お見舞いの言葉や義援金が届けられたことに心からの感謝を表した。

仙台教区は、日本の司教団の支援体制によって、この3年間助けられてきた。この「サポート体制はさらに3年間継続する」と、司教団が2月の臨時司教総会で決議した。その決意の表明が、今回のミサである。

被災された方々から、「いてくださるのは、カリタスさんだけ。ずっといてもらえたら、ありがたいなあ」という声が聞こえている。私たちの信仰の中心は「主は復活され、いつもわたしたちと共にいてくださる」というものである。キリストの弟子である私たちが、被災者の苦悩と不安を受け止めようとするのは、復活の喜びを希望のうちに待つ、信仰を生きるものにしてあり、業そのものである。



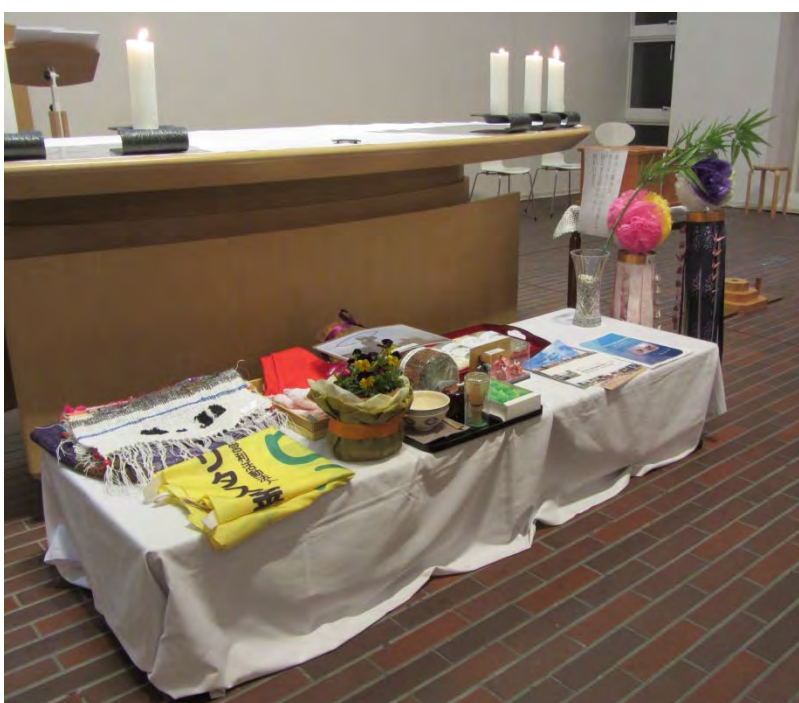
共同祈願

共同祈願では、ベースの立場から、また小教区で、被災者のために活動している教会代表の方々から、被災者のため、原発事故で苦悩している人々のため、仮設住宅で不安を抱えている人々のために、下記の9人の方が祈りをささげた。

- 「障がい者自立センターかまいし」名古屋教区信徒：深堀 崇氏
- 「カリタス米川（南三陸）ベース」ベース長：千葉道生氏
- 「カリタス原町ベース」ベース長：Sr.畠中
- 「さいたまサポートステーションもみの木」いわき教会：佐藤賢二氏
- 「塩釜教会」塩釜教会 教会委員長：溝田知宏氏
- 「NPO福島やさい畑」西仙台教会 教会委員長：上野 隆氏
- 「東仙台教会」東仙台教会 教会委員長：和野邦彦氏
- 「北仙台教会」北仙台教会：芳賀ヒロ子さん
- 「小百合園」善き牧者の愛徳聖母修道会院長：Sr.佐伯裕子

奉納

感謝の典礼に入り、賛歌の後、奉納が始まった。元寺小路教会の信徒がパンとぶどう酒をささげた後、いくつかのベースの代表者によって、そのベースを象徴するものを奉納した。さらに、小教区でボランティアグループを立ち上げ、復興支援活動をしている小教区の中から、いくつかの教会にシンボルとなるものを奉納していただいた。



【宮古ベース】——今野 忍

岩手県宮古市には、札幌教区が開設し、支えてくださる「宮古ベース」がある。札幌から先生が来てくださり、仮設に住む被災者の方々が、織ってくださった「さおり織」を奉納した。

織るのが少し難しいが、それだけに綺麗に出来上がった時の喜びと元気を地域の人々に与えてくれる。

【大槌ベース】——片岡英和氏

長崎教会管区が開設し、支え続けてくださっている「大槌ベース」は、「サンタクロースの衣装」と「大槌旧ベースの建物本体のコンクリート破片と土入りの小箱」を奉納した。

昨年の12月1日から25日までに仮設住宅等78か所で、クリスマス会を開き、プレゼントをお届けした。ボランティア、スタッフとともにサンタになりきった時の象徴の衣装である。

旧ベースは、被災地に灯りをともし、活動を支えてくれた。

【カリタス釜石】——伊瀬聖子さん

仙台教区サポートセンター直轄の釜石ベースは、2013年3月にNPO法人を取り、「カリタス釜石」となった。「お茶っこサロンの幟」を奉納した。年間600回を超えるお茶っこサロンは、地域住民とカリタス釜石を繋ぐ信頼関係のシンボルとなっている。

【大船渡ベース】——エドガル神父

大阪教会管区が大船渡市に開設した「大船渡ベース」は、「高田松原奇跡の一本松の木片」と「大船渡駅近くにある震災時の時刻で止まった時計の写真」を奉納した。

津波に耐えて残った松は、人々に勇気と希望を与え、また、時計は、震災を風化させないシンボルである。

【石巻ベース】——Sr.細谷朋子

仙台教区サポートセンター直轄の「石巻ベース」は、「ベース花壇の植物」を奉納した。

「スマイルサポーター」として登録している「石巻ベース」は、津波の水をかぶった花壇をボランティアとスタッフが耕し、野菜の苗や花を植え道行く人の心を和ませている。



【松木町教会】——鈴木キミ子さん

福島市にある松木町教会では、震災当初から炊き出しや写真洗浄などの活動をしてきたが、2011年6月から浪江町の方々が住む、「宮代仮設住宅」で、「ふれあい茶の湯」のボランティア活動をしている。

茶の湯で、ほっこり、ゆったりした心、時間をもっといただくことで、大変喜ばれている。そのシンボルとして、「お茶碗と茶筌」を奉納した。

【いわき教会】——佐々木三代子さん

福島県いわき市には、たくさんの仮設住宅が建っている。その中でも特に、いわき教会は津波で流された人々の支援活動をしている。特に、漁師さんは、福島原発の汚染水の問題で、漁をする許可がない。その漁師のおかみさんたちの自立支援のため、お餅作りをしている。その「お餅」を奉納した。

[八木山教会]——野田 和雄氏

仙台市八木山教会は、津波被害を受けた宮城県亘理町の仮設で「お茶っこサロン」を継続している。その中で八木山教会の信徒が先生となり、着物を洋服に仕立て直し、その作品をフリーマーケットに出せるまでになった。この日奉納したのは「おひな様」である。

着物の端切れから生まれた「おひな様」の評判はよく、仮設住民のみなさんの生きる励みになっている。

[一本杉教会]——淀川 喜正氏

仙台市内にある一本杉教会は、津波被害の大きかった荒浜地区の方々が住む仮設住宅で「お茶っこサロン」を開いている。

仙台は、七夕祭りで有名な地であり、仮設住宅でも、七夕祭りを毎年おこなっている。

住民の皆様に元気と勇気を与える「七夕飾り」のミニチュアを奉納した。

[仙台教区サポートセンター]——小野 武氏

仙台教区サポートセンターが立ち上げられてから約3年、この歩みは、ボランティアの方々とベースで奉仕して下さったスタッフの皆様、お祈りで支えて下さった皆様とともに歩んだ道のりであった。この歩みを、記録した小冊子『よりそいながら明日へ——東日本大震災支援活動カトリック教会の歩み』と「復興支援カレンダー」を奉納した。

[カトリック中央協議会復興支援室]——神田 裕神父

復興支援室は、東日本大震災以来、日本のカトリック教会の中心となって活動を陰から支えてきた。今回は、全国のカトリック教会、学校などから、祈りを募集し、それを1冊の小冊子にまとめた。この皆様の心からの「祈り」を奉納した。

**国際カリタスに感謝**

聖体拝領の後、このミサに参列していた国際カリタス視察団の3人のメンバーに、「今回の未曾有の大震災にいち早く、救援の手をさしのべてくださり、現地にも足を運び、資金援助をして下さった国際カリタスには、感謝しても、しきれないくらいである」との平賀司教の謝辞とともに、CRS (アメリカカリタス) のグレッグ・オーベリー氏、カリタスドイツのラインハルト・ヴェークナー氏とウオルフガング・ゲルストナー氏に花束と記念品が手渡され、盛大な拍手が送られた。



謝辞に答え、ヴェークナー氏は、「私は、震災以来今回で3回、被災地を訪れた。最初のひどい有様に心がつぶれる思いがした。しかし、2回、3回と、着実に復興の歩みを続けている日本の皆様に頭がさがる思いである。私たちは、仕事柄、被災地に行くことが多いが、これほど模範的に復興の歩みを歩んでいるところは、今までなかった。これから、日本を見習いなさいと言うだろう」と述べた。

続いて平賀司教は、「国際カリタスと共に、忘れてならないのは、日本のカリタス、つまり、カリタスジャパンの働きである。責任司教の菊地司教様の支えがなければ仙台教区の支援活動はなかったでしょう」という感謝の言葉とともに、菊地司教に花束を贈呈した。

司教の紹介と閉祭の祝福

ついで、平賀司教から参列の司教たち一人ひとりの紹介がなされ、その後、高見大司教が

全国の教会で唱える「東日本大震災被災者のために祈りⅡ」が採択されたこと、「平賀司教さまの原案に、典礼委員会が手を加えた」ものとの紹介があり、全員でこの祈りを唱え、さらに被災犠牲者のために祈りと活動、支えの必要性を強く感じた。

最後に全司教たちによる荘厳な祝福でミサを終えた。

すべての教区、教会を挙げて被災地支援活動に取り組みます！

